

東京女子高等師範学校と旧韓国～朝鮮の教育

稲葉， 継雄
九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門 ： 教授

<https://doi.org/10.15017/7357541>

出版情報：国際教育文化研究. 1, pp.1-14, 2001-03-30. Comparative and International Education,
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



東京女子高等師範学校と旧韓国～朝鮮の教育

稲葉継雄

はじめに

1872年の「学制」にもとづいて同年5月、東京に「師範学校」が開設された。同校は、翌1873年、師範学校の全国展開にともなって「東京師範学校」となり、1886年には「高等師範学校」、さらに1902年には「東京高等師範学校」となった。（東京教育大学を経て、現・筑波大学）

男子の「師範学校」に2年遅れの1874年3月、「女子師範学校」が創設された。（これが今日のお茶の水女子大学の淵源である。）独立の「女子師範学校」はしかし、1885年8月、東京師範学校に合併され、その女子部となる。続いて翌1886年の4月には、東京師範学校の高師昇格にともない「高等師範学校女子部」となった。これが「女子高等師範学校」として分離独立したのは1890年3月、さらに「東京女子高等師範学校」となったのは1908年4月のことである。本稿は、このような変遷をたどった女子師範学校～東京女子高等師範学校の卒業生の旧韓国および植民地朝鮮における教育活動を追跡したものである。

1904年1月17日、東京師範学校時代（1882年）以来の同窓会「茗溪会」から女子部が分離する形で誕生した「桜蔭会」の発会式が挙行されたが、「当日は新年会及び暹羅皇室に招聘されし安井哲、河野キヨ両氏の送別会を兼ねたる会合」（1）であった。安井哲<1890 高等師範科>と河野キヨ<1903 技芸科>は、シャム国政府のお雇外国人（教育顧問）として招聘され、1904年から1907年まで同国皇后女学校の教育に携わった。（氏名の後の括弧内は卒業年と修了学科を示す。以下同じ）

また、戸野（旧姓西里、以下「旧姓」を省く）みちえ<1890 高等師範科>が、1904～1905年、「清国政府の聘に応じて湖北省武昌女子師範創設及び保育事業に従事し」（2）、野地（岡村）たか<1899 家事専修科>が、1905～1907年、「清国福建省福州府女子職業学堂教習に聘せられ」（3）た。

このように桜蔭会は、1900年代から積極的な海外進出の姿勢を見せていたのである。ちなみに1938年10月当時の桜蔭会員は、総数3955名、うち259名（6.5%）が外地に在住していた。外地在住会員の内訳は、樺太5名、台湾52名、朝鮮74名、関東州39名、満州国45名、南洋2名、外国42名で、地域としては朝鮮が最も多かったのである。

ところで桜蔭会は、母校創立 60 周年記念事業として『桜蔭会史』を編纂し(1940 年 2 月完成)、約 2600 名から得たアンケートをもとに、各人の職歴や家族の状況まで記した詳細な会員名簿を収録している。歴代会員の約 65%の 1939 年以前の履歴という限定付きではあるが、これが本稿の基本資料である。この資料には、旧韓国～植民地朝鮮での教職歴を有する者 92 (日本人 89、朝鮮人 3) 名が見出される。以下、学校種別に彼女らの足跡を辿ってみよう。

1. 高等女学校

東京女子高等師範学校が中等教員養成機関であっただけに、桜蔭会員の旧韓国～植民地朝鮮における勤務先は、高等女学校と女子高等普通学校(朝鮮人高等女学校)がほとんどであった。高等女学校関係者の氏名・勤務校・在任期間は次のとおりである。

永留(内山) 美	釜山	1907～1909
鈴木 ひさ	京城	1910～1911
清末 トメ	仁川	1910～1921
関根(茂木) ゲン	京城	1911～1917
〃	京城第一	1922～1923
川元(西) ヨシ	京城	1912～1913
〃	元山実科	1914～1916
須藤(大野) リツ	京城	1912～1913
新納(西沢) 悦英	京城	1912～1914
額賀(松本) 茂乃	京城	1912～1918
杉原 みつ	仁川	1913～1914
林 フミコ	釜山	1913～1914
岡野(鈴木) トミ	京城	1913～1917
〃	京城第一	1922～1925
藤木 フク	平壤	1913～1921
森(金田) マキ	京城	1914～1919
始関(大池) ふさよ	京城	1915～1916
鈴木(半野) ミネ	仁川	1915～1916
内田(大山) カネ	京城	1915～1916
山口(牛島) シヅ	平壤	1915～1917
川上(北原) 千鶴	元山実科	1916～1917
石川(松宮) ユキ	大邱	1916～1918
竹川(久恒) 月与	大邱	1916～1920
松本(樫部) 鳥羽	京城	1916～1920
堀井(大村) 峯	平壤	1916～1921

久保村（水谷）ゆう	釜山	1917 ～ 1919
斉藤 千代	釜山	1917 ～ 1919
近藤（佐藤）ふじ	大邱	1917 ～ 1919
三村（藤原）タカノ	平壤	1917 ～ 1920
小林 静江	元山	1917 ～ 1921
〃	釜山	1922 ～ 1925
山本（坂本）ヤス	馬山	1920 ～ 1924
高橋（熊谷）いし	京城	1920 ～ 1931
荒木（野尻）ヲシエ	平壤	1921 ～ 1925
阿部（斉藤）アイ	京城第一	1922
佃（吉村）清子	大邱	1922 ～ 1925
鈴木（樫崎）チヨノ	京城第二	1922 ～ 1928
長富（麻生）カメヨ	釜山	1922 ～ 1929
岡村（足達）千鶴	清州	1923 ～ 1924
島岡マサエ	馬山	1923 ～ 1925
梶原（岩橋）慶子	京城第一	1923 ～ 1925
中庭 須磨	京城第二	1923 ～ 1926
〃	釜山	1935 ～ 1938
中馬（三島）キチ	京城第二	1923 ～ 1931
稲垣（土橋）をり	馬山	1923 ～ 1932
池田（浜武）亀代	京城第一	1924 ～ 1926
大関（大内）アヤメ	大田	1924 ～ 1926
小泉（辰川）清	大田	1924 ～ 1926
野村 シゲ	大邱	1924 ～ 1927
藤谷（柳井）みさを	全州	1924 ～ 1927
小宮山（木塚）コウ	京城第一	1924 ～ 1934
市島 キミ	釜山	1925 ～ 1934
山根（岡田）サヨ	平壤	1926 ～ 1928
対馬（成田）タミ	清津	1926 ～ 1929
田村（村上）節代	京城第一	1926 ～ 1936
斉藤（藤原）テウ	釜山	1927 ～ 1939
池上 恒子	釜山	1930 ～ 1935
松下アヤ子	新義州	1930 ～ 1939（以後不明）
松本（浦田）静江	木浦	1932 ～ 1934
緒方 愛子	大田	1932 ～ 1938（以後不明）
弘田（榎本）タケノ	釜山	1932 ～ 1937
〃	群山	1938 ～ 1939（以後不明）

中馬（角崎）寿美枝	仁川	1932 ～ 1939（以後不明）
村田きくえ	咸興	1933 ～ 1939（以後不明）
渡辺まつ枝	鎮海	1933 ～ 1936
〃	大田	1936 ～ 1939（以後不明）
中村（山下）綾子	京城第二	1934 ～ 1939（以後不明）
檜崎 下枝	海州	1936 ～ 1937
〃	海州旭町	1938 ～ 1939（以後不明）
鈴木（野口）稔子	大田	1937 ～ 1939
新井マサコ	興南	1937 ～ 1938
〃	京城第二	1939（以後不明）
角崎登美枝	京城第二	1939（以後不明）

上のリストをみると、京城（京城第一）高等女学校 17 名、釜山高等女学校 11 名と京城・釜山への集中傾向が著しい。これに次ぐのは平壤と京城第二の 6 名、大邱と大田の 5 名である。釜山高等女学校は 1906 年 4 月、京城高等女学校は 1907 年 4 月、男子の京城中学校（1909 年 4 月創立）に先立って開設された日本人中等学校の名門であったが、この両校、とくに京城高等女学校の場合は、その教師陣のかなりの部分を桜蔭会が支えたといつてよい。同校には、1912 年から 17 年にかけて常に 5～6 名の桜蔭会員が在任した。たとえば 1912 年度の同校教員数は、男 10 名、女 6 名であるが、女教員中の 5 名は桜蔭会員だったのである。教員の絶対数の増加とともにこの比率は徐々に低下するものの、それでも大派閥であったことに変わりはない。釜山高等女学校の場合、京城ほどの集中度ではない。しかし、同校にもほぼ常時複数の桜蔭会員が在職しており、その比率は、大まかにいって女教員の約 3 分の 1 であった。

1927 年以前の釜山高等女学校旧職員については、同年発行の『釜山教育五十年史』によって、次のように正確な就任・離任の年月日を知ることができる。

永留 美	1907. 4. 9 ～ 1909. 4. 8
林 フミコ	1913. 3. 3 ～ 1914. 5.30
水谷 ゆう	1917. 3.19 ～ 1919.12.31
斉藤 千代	1917.11.20 ～ 1919. 7.29
小林 静江	1922.12.20 ～ 1925.11.13(4)

釜山勤務者のみならず、彼女らの教員としての旧韓国・朝鮮滞在期間は概して短い。それは、既婚者の場合、夫の転勤に随行して異動し、未婚者の場合は、結婚のために帰国（内地帰還）することが多かったからである。裏を返せば、長期滞在者は、終始独身であった（独身時代が長かった）か、夫の職場が長期間彼の地にあったということになる。以下、各人の経歴を辿りながらこれらの傾向を確認してみよう。

永留（内山）美＜ 1907 文科＞は、卒業と同時に結婚し、釜山高女教諭となったが、1910

年には帰還している。夫（会社員）の転勤に従ったものであろう。このように結婚後渡航し、短期間（3年未満）で現地退職あるいは内地帰還した者としては、他に杉原みつ< 1904 家事専修科>・川上（北原）千鶴< 1906 家事専修科>・近藤（佐藤）ふじ< 1917 技芸科第二部>・三村（藤原）タカノ< 1912 家事専修科>・阿部（斉藤）アイ< 1920 文科>・島岡マサエ< 1905 理科>・池田（浜武）亀代< 1894 高等師範科>・山根（岡田）サヨ< 1918 家事科第一部>がいる。

清末トメ< 1903 国漢専修科>は、1910年から11年の長きにわたって仁川高女に勤務した。独身であったことが朝鮮長期滞在を可能にしたものと思われる。藤木フク< 1907 国体専修科>・市島キミ< 1918 臨教家事科>・池上恒子< 1930 理科>・松下アヤ子< 1930 家事科>・村田きくえ< 1927 家事科>・渡辺まつ枝< 1930 理科>・角崎登美枝< 1935 家事科>も、この独身・長期（5年以上）滞在組である。

関根（茂木）ゲン< 1911 国体専修科>は、上掲リストの京城高等女学校と京城第一高等女学校（1922年5月、京城第二高等女学校の新設にともない京城高等女学校を改称）の間に平壤および京城の女子高等普通学校に勤務した。内鮮双方の女子中等教育に従事したわけである。次節でみるように、藤木フク・山口（牛島）シヅ< 1912 技芸科>・斉藤千代< 1915 技芸科第二部>・山本（坂本）ヤス< 1914 技芸科>・中庭須磨< 1923 家事科>・村田きくえ・角崎登美枝も同様である。

新納（西沢）悦英< 1910 理科>は、京城高等女学校を辞して内地に帰り、その直後に結婚している。結婚あるいはその準備のために帰還したものと推測される。新納のほかこのタイプに属するのは、始関（大池）ふさよ< 1912 文科>・堀井（大村）峯< 1916 技芸科第二部>・久保村（水谷）ゆう< 1915 臨教家事科>・斉藤千代・岡村（足達）千鶴< 1923 理科>・鈴木（野口）稔子< 1937 臨教理家科>である。

岡野（鈴木）トミ< 1912 技芸科>は、京城高等女学校に勤務した後いったん帰還し、改めて京城第一高等女学校に赴任した。中庭須磨も、京城第二高等女学校を辞任して内地に帰り、後述するように1933年再渡航、釜山女子高等普通学校教諭となった。内地・朝鮮間を2往復したことが確かめられるのはこのふたりである。

朝鮮勤務中に結婚した者は、結婚を機に退職あるいは内地帰還した者と、その後も3年以上勤続した者とに分けることができる。前者に属するのは、内田（大山）カネ< 1915 臨教家事科>・荒木（野尻）ヲシエ< 1918 理科>・藤谷（柳井）みさを< 1924 文科>・斉藤（藤原）テウ< 1925 理科>である。

夫とともに渡航し、朝鮮でかなり長期にわたって勤務した者、あるいは朝鮮勤務中に結婚したがその後も3年以上勤続した者は、森（金田）マキ< 1914 文科>・小林静江< 1912 臨教家事科>・高橋（熊谷）いし< 1917 技芸科選科>・鈴木（楢崎）チヨノ< 1905 理科>・長富（麻生）カメヨ< 1912 臨教家事科>・梶原（岩橋）慶子< 1923 理科>・中庭須磨・中馬（三島）キチ< 1908 理科>・稲垣（土橋）をり< 1911 国体専修科>・小宮山（木塚）コウ< 1923 家事科>・対馬（成田）タミ< 1918 臨教家事科第一部>・田村（村上）節代< 1924 家事科>・弘田（榎本）タケノ< 1927 家事科>・中馬（角崎）寿美枝< 1932

家事科＞・中村（山下）綾子＜ 1933 家事科＞である。彼女らの夫の職業は、銀行員・満鉄技師・朝鮮総督府官吏・教員・府会議員・会社員・軍人・新聞記者などさまざまであったが、教員だったのは、鈴木チヨノ・梶原慶子・田村節代の夫である。

鈴木孫彦とチヨノは 1917 年に結婚、チヨノが京城第二高等女学校教諭であった 1922 ～ 28 年当時、孫彦は京城高等商業学校の校長であった。

梶原慶子の夫梅次郎は、茗溪会員すわなち東京高等師範学校卒であり、1918 ～ 21 年平壤女子高等普通学校教諭、1922 ～ 34 年京城第一高等普通学校教諭、1935 年以降仁川中学校長を務めた。両人が結婚したのは、梅次郎が京城第一高等普通学校の、慶子が京城第一高等女学校の教諭であった 1924 年のことである。なお慶子は、結婚の翌年に京城第一高女を辞任したが、後述するようにその後、京城の私立彰徳家政女学校の教員として教壇に復帰した。

田村節代は、京城第一高女教諭時代の 1928 年、京畿道師範学校教諭田村民衛と結婚した。民衛は、1930 年まで京畿道師範学校教諭、1931 年以降京城第二高等普通学校～景福中学校（京城第二高普の後身）の教諭であった。

本節の最後に、榎崎下枝＜ 1935 体家科＞と泥谷（紀内）成＜ 1899 高等師範科＞について補足しておきたい。

榎崎下枝が勤務した海州旭町高等女学校は、1938 年 4 月、海州高等女学校を改称したものである。つまり榎崎は、1936 年以来同一校に勤めたのである。

泥谷成の経歴は、『桜蔭会史』に「大正十一～四年京城公立高女」(5)とあるが、「朝鮮総督府職員録」によれば当時の京城第一・第二高等女学校職員の中に彼女の名はない。ただ、夫の泥谷良次郎（東京高師卒）は、1921（大正 10）年から 1925（大正 14）年にかけて京城日報の理事～副社長であったから、成が朝鮮のいずれかの学校の教員であったことは事実であろう。

2. 女子高等普通学校

先に見た日本人高等女学校の経験者 8 名も含め、朝鮮人の女子高等普通学校（1911 年 10 月以前と 1938 年 4 月以降は日本人学校と同じく高等女学校と称した）に勤務したのは次の 28（日本人 25、朝鮮人 3）名である。

佐藤（浅野）ユキ	漢城	1909 ～ 1911
”	京城	1911 ～ 1919
藤木 フク	漢城	1910 ～ 1911
”	京城	1911 ～ 1913
重田（福井）ひさ	淑明	1912 ～ 1925
外山（宮崎）素	淑明	1914 ～ 1920
蟻川（西浦）はま	進明	1915 ～ 1917
斉藤 千代	平壤	1915 ～ 1917
山本（坂本）ヤス	平壤	1916 ～ 1920

須藤（柄沢）ノブ	進明	1917 ～ 1919
山口（牛島）シヅ	淑明	1917 ～ 1920
関根（茂木）ゲン	平壤	1918 ～ 1920
”	京城	1921
井上（伊藤）たい	進明	1919 ～ 1921
堀（木津）しげ	京城	1920
延原（池袋）寿賀	京城	1920 ～ 1924
”	淑明	1930 ～ 1939
西本（今井）かね	淑明	1921 ～ 1923
工藤 シゲ	京城	1921 ～ 1923
孫 貞圭	京城	1921 ～ 1938
”	京畿	1938 ～ 1940（以後不明）
阿部（内田）エク	平壤	1923 ～ 1937
”	正義	1937 ～ 1939（以後不明）
津田（塚本）節子	淑明	1924 ～ 1930
任 淑宰	淑明	1924 ～ 1926
”	大邱	1926 ～ 1937
中江（松橋）やす	進明	1927 ～ 1939（以後不明）
趙 圻烘	光州	1929
”	進明	1930 ～ 1939（以後不明）
池田 英	淑明	1930 ～ 1931
村田きくえ	釜山	1931 ～ 1932
小西たみ子	好寿敦	1932
中庭 須磨	釜山	1933 ～ 1934
角崎登美枝	釜山	1935 ～ 1938
”	釜山港	1938
井上 知子	釜山	1937
矢野（浅野）ムツ	進明	不明

1938 年 4 月、民族別学校の名称統一と部分的「内鮮共学」が図られ、以後日本人学校・朝鮮人学校の区別が曖昧になるので、1937 年度についてみると、高等女学校は 30（公立 29、私立 1）校、女子高等普通学校は 21（公立 11、私立 10）校、高等女学校の教員は男 275（日本人 275）名、女 166（日本人 162、朝鮮人 4）名、女子高等普通学校の教員は男 174（日本人 86、朝鮮人 88）名、女 115（日本人 35、朝鮮人 80）名であった。この時点の日本人女教員数（高等女学校 162、女子高等普通学校 35）を基準に単純計算すると、桜蔭会員の歴代高等女学校関係者 64 名に相当する女子高等普通学校関係者は 13.8 名ということになる。したがって、日本人桜蔭会員 25 名の女子高等普通学校（朝鮮人高等女学校）への関与は、絶対数はともかく、

比率からすればかなり積極的であったといえることができる。

彼女らの勤務校をみると、最も多かったのは淑明女子高等普通学校の8名である。また、淑明と同じく私立の進明女子高等普通学校も6名を数える。両校は、いずれも1906年厳妃（当時の国王高宗の妃）により、明新女学校・進明女学校として設立された姉妹校である。厳妃の意を体して、淑明は日本式、進明は西洋式の教育方式をとった。これが、両校が日本人教員を必要とした所以である。なお、女子高等普通学校となったのは、淑明が1911年、進明が1912年である。

官公立への関与は、旧韓国唯一の官立女学校として1908年4月に開設された漢城高等女学校から始まっている。1911年官立京城女子高等普通学校、1925年公立京城女子高等普通学校、1938年公立京畿高等女学校と変遷した同校に勤務した桜蔭会員は、延べ7名である。その他の官公立関係者は、平壤・釜山（釜山港）各4名、大邱・光州各1名である。

官公私立を通じた特色として次の2点を指摘することができる。第1に、私立淑明・進明の所在地も京城であり、官公立1校を合わせた京城所在3校への集中現象が顕著である。第2に、桜蔭会員が関係した女子高等普通学校は全部で9校に過ぎず、ほぼ半島全域の19校に及んだ日本人高等女学校ほどの広がりが見られない。

次に、各人の経歴を補足しておこう。

佐藤（浅野）ユキ<1905 理科>は、韓国政府に招聘されて渡航した。1909年8月20日付で「任官立漢城高等女学校教授叙判任官二等 浅野雪子」(6)という辞令が出ている。併合後も引き続き京城女子高等普通学校に勤務したが、「此間朝鮮総督府学務局の命に依り教科書編纂に携は」(7)った。1919年の退職は、朝鮮駐在陸軍軍医との結婚によるものであった。

藤木フクも、佐藤（浅野）と同じく官立漢城高等女学校に赴任したが、旧韓国「官報」には辞令が見出されない。

重田（福井）ひさ<1910 文科>は、1912年、京城の重田勘次郎のもとに嫁いだ。茗溪・桜蔭カップルである。ちなみに、ひさが淑明女子高等普通学校に勤めた1912～25年当時の勘次郎の職歴は、1911～15年度京城専修学校教諭、1916～17年度同教授、1918～21年度咸興高等普通学校長、1922年度朝鮮総督府学務局事務官、1923～24年度京城高等商業学校教授、1925～27年度京城第一高等普通学校長であった。夫の咸興在勤中も、ひさは京城にとどまったことになる。

淑明女子高等普通学校における重田ひさは、地理・歴史担当の教諭であったが、当時としてはモダンなスポーツ・ウーマンでもあったようである。『淑明五十年史』に、「重田先生、中川先生たちが庭球をしているので、みな不思議な顔をして珍しがった」(8)というくだりがある。

外山（宮崎）素<1911 理科>は、東京女高師で重田ひさの1年後輩にあたり、まだ独身であった彼女は、重田に2年遅れて淑明女子高等普通学校に赴任した。

須藤（柄沢）ノブ<1909 理科>は、1915年須藤文吉と結婚し、1917年、夫の京城専修学校教授就任にともなって渡航、進明女子高等普通学校の嘱託を務めた。

関根（茂木）ゲンは、前述したように高等女学校から女子高等普通学校に移り、再び高等女

学校に復帰した。日本人教育と朝鮮人教育の双方に携わった 8 名の中でも、このように日→朝→日という異動を経たのは関根と中庭須磨のふたりだけである。(他は日→朝あるいは朝→日)

井上(伊藤)たいく 1907 数物化専修科>と堀(木津)しげく 1916 理科第一部>は、結婚後渡航したが、家庭の事情からか朝鮮滞在は短期間であった。

これに対して延原(池袋)寿賀く 1902 文科>は、1907 年に結婚して 1920 年に渡航、以後少なくとも 19 年の長きにわたって朝鮮の諸学校(京城女子高等普通学校・京城師範学校・淑明女子高等普通学校)に奉職した。『淑明五十年史』には、日本内地への修学旅行(1932 年 5 月 10～22 日)や離任式(1939 年 4 月 21 日)などの関係記述(9)がある。

工藤シゲく 1902 文科>は、1921～23 年京城女子高等普通学校に勤務した後台湾に移り、1924～28 年、台南第一高等女学校教諭を務めた。外地から、さらに新たな外地へと足を伸ばしたわけである。夫の転勤にともなって結果的に複数の外地で勤務することになった者は数名いるが、独身の身で外地を渡り歩いたのは工藤と、後述する井上知子の 2 名である。

孫貞圭く 1921 臨教家裁科>は、卒業後直ちに京城女子高等普通学校に就職し、同校が京畿高等女学校となった後も勤続した。当時から「朝鮮総督府施行教員検定試験委員を嘱託すること八ヶ年に及び尚ほ愛婦分会長、総督府保護観察所保護司となる」(10)など活発な社会活動を展開、戦後は、「京城女子師範大学学長を務め、1947 年、ソウル大学校初代女学生処長を歴任した。」(11)

阿部(内田)エック 1913 文科>は、官～公立平壤女子高等普通学校から 1937 年、同じく平壤所在の私立正義女子高等普通学校に移った。同校は、1894 年、監理教(Methodist)派のミッション・スクール正義女学校として創立され、1920 年女子高等普通学校、1938 年高等女学校となった。阿部が勤務したのは、この正義女子高等普通学校～正義高等女学校である。

津田(塚本)節子く 1924 臨教国漢科>は、卒業と同時に京城帝国大学予科教授津田栄と結婚、同年から 1930 年まで淑明女子高等普通学校教員であった。ちなみに、両人が結婚した 1924 年は京城帝大予科が開設された年であり、津田栄は、その教授として 1942 年 3 月まで在職した。

中江(松橋)やすく 1915 文科第二部>は、1924 年に結婚し、1927 年に進明女子高等普通学校教員となったが、1927 年当時、夫の中江勝は京城第一高等普通学校教諭であった。やすが進明女子高等普通学校にいつまで勤めたかは明らかでないが、勝は、京城第一高等普通学校～京畿中学校(京城第一高普の後身)の教諭として少なくとも 1941 年までは勤続している。

池田英く 1930 臨教歴地科>は、『桜蔭会史』の名簿には結婚歴が記されていないが、淑明女子高等普通学校の「旧教職員名单」では「樋口英」(12)となっている。

小西たみ子く 1932 文科>が卒業後 1 年間勤務した好寿敦(ホーストン)女子高等普通学校は、1904 年、好寿敦女学校として京畿道開城に設立された監理教派の私立学校である。小西は、その後京城の日本人学校に移るが、一貫して私立女学校の教員であったという意味でユニークな経歴の持ち主である。

中庭須磨は、1923 年卒業と同時に京城第二高等女学校に就職し、1927 年、内地に帰って会社員と結婚した(婿養子)。1933 年、再び渡航して釜山女子高等普通学校教諭となり、次いで 1935

年、釜山高等女学校教諭となったことは上述のとおりである。

角崎登美枝が勤務した釜山女子高等普通学校と釜山港高等女学校は、1938 年 4 月に改称された同一校である。

井上知子< 1937 理科>は、釜山女子高等普通学校に就職したものの、僅か 1 年で関東州の旅順高等女学校へ転出した。

3. その他

高等女学校・女子高等普通学校以外の関係者は少数に過ぎないが、その中で私立各種学校に勤務した者は 6 名を数える。その氏名・勤務校・在職期間は次のとおりである。

山口（牛島）シヅ	京城女子技芸学校	1914 ～ 1915
渡辺（野崎）包子	貞信女学校	1924 ～ 1925
佐久間（清水）しず	須皮亜女学校	1928 ～ 1937
小西たみ子	泰和女学校	1933 ～ 1936
〃	彰徳家政女学校	1936 ～ 1939（以後不明）
梶原（岩橋）慶子	彰徳家政女学校	1934 ～ 1939
長富（麻生）カメヨ	大谷家政専修学校	不明

山口（牛島）シヅが結婚した年は明らかでないが、夫・山口正賢は東洋拓殖社員（後に京城支店長）であった。彼女が朝鮮で最初に勤めた京城女子技芸学校は、1910 年の併合直前に設立され、1914 ～ 5 年当時はまだ日本人のみの女学校であった。彼女がその後、平壤高等女学校～淑明女子高等普通学校に異動したことは上述のとおりである。

渡辺（野崎）包子< 1923 選科>が勤めた京城の貞信女学校は、1887 年創立の伝統を誇る長老教（Presbyterian）系のミッション・スクールである。彼女は、1926 年内地に帰って結婚しているが、その後もキリスト教系の私立学校に勤務した。このことから推して、彼女自身クリスチャンだったものと思われる。

佐久間（清水）しず< 1905 文科>は、夫と死別した翌年（1928 年）全羅南道光州に渡り、須皮亜（スピア）女学校教員となった。須皮亜女学校も、貞信女学校と同じく長老教系の朝鮮人学校である。佐久間が須皮亜女学校を辞職した 1937 年は、神社参拝拒否のため同校が閉校処分となった年である。彼女はしかし、その後も光州に在住した。

小西たみ子は、『桜蔭会史』に「朝鮮開城府私立好寿敦女学校に就職、同八～十一年京城府私立泰和女学校教員となり同十一年現職（京城府私立彰徳家政女学校教員 — 稲葉註）に就く」（13）とあるが、泰和女学校は、1933 ～ 36（昭和 8 ～ 11）年当時の総督府『朝鮮諸学校一覧』には登場しない。彰徳家政女学校は、1928 年設立の日本人学校である。

梶原（岩橋）慶子は、前述したように京城第一高女教諭を辞任した後暫く教壇から遠ざかり、1934 年、彰徳家政女学校教員となったが、1939 年 9 月 15 日他界した。

長富（麻生）カメヨが『桜蔭会史』編纂当時大谷家政専修学校嘱託であったことは確かであるが、1929年に釜山高等女学校を辞して後いつ大谷家政専修学校に就任したかは定かでない。ちなみに、大谷家政専修学校が私立各種学校として認可されたのは1935年4月であり、1940年度以降の校名は釜山大谷女子専修学校であった。

以上のほか在朝鮮諸学校に関係した桜蔭会員は次のとおりである。

須藤（瀧沢）ちょう	朝鮮総督府済生院保母長	1912～1914
延原（池袋）寿賀	京城師範学校教諭	1925～1929
阿部 和	京城女子実業学校嘱託	1928～1937
〃	淑明女子専門学校教授	1939～（以後不明）
松本（浦田）静江	京城女子実業学校教諭	1935～1938
大高 すず	淑明女子専門学校教授	1938～1939（以後不明）
任 淑宰	淑明女子専門学校助教授	1939～（以後不明）
倉田 君恵	京城女子師範学校教諭	1939～（以後不明）
早川（沼野）はな	京城帝大附属病院看護婦養成所講師	不明

須藤（瀧沢）ちょう＜1905 国体専修科＞が勤務した朝鮮総督府済生院は、1912年3月に創設された植民地朝鮮唯一の官立特殊教育機関である。彼女は、済生院の開設から2年間保母長を務め、その間、夫・須藤信治は済生院訓導であった（後に主事・養育部長）。

延原（池袋）寿賀は、ふたつの女子高等普通学校（京城および淑明）勤務の中間期を京城師範学校教諭として過ごしている。内地における桜蔭会員は、高等女学校に次いで師範学校にも盛んに進出したが、朝鮮の師範学校に勤務したことが確認されるのは延原と倉田君恵＜1933理科＞だけである。

阿部和＜1909 文科＞は、1911年、総督府官吏であった田中丁蔵と結婚（婿養子）、内地での教職を辞して渡航した。暫く教壇を離れていたが、夫死亡後の1928年、京城女子実業学校の嘱託として教職に復帰した。彼女が1939年に就任した淑明女子専門学校は、同年、財団法人淑明学園によって開校された、淑明女子高等普通学校～淑明高等女学校と同系列の学校である。淑明女子専門学校教授としての阿部和は、修身・作法を担当し、学生主事・寮務主事を務めた。

松本（浦田）静江は、木浦高等女学校から京城女子実業学校に転じた。学校の種類は異なるが、日本人女子中等学校間の異動である。

大高すず＜1917 技芸科第一部＞は、淑明女子専門学校の開校（1939年4月）に先立つ創立過程から同校に参加したようである。担当は家事と裁縫で、技芸科主任・学生主事などを歴任した。

任淑宰＜1924 選科＞は、上述したように淑明女子高等普通学校と大邱女子高等普通学校の教諭を務め、淑明女子専門学校の開校と同時に同校助教授となった。担当は裁縫・作法であった。ちなみに、任淑宰担当の裁縫・作法は、「韓裁」「韓作法」と、阿部和の「作法」や大

高すずの「日裁」とは区別されており(14)、少なくとも初期の淑明女子専門学校においては、日本人教員による日本化教育のみならず朝鮮人教員による朝鮮文化の教育もなされていたことが明らかである。なお任淑宰は、民族解放後も淑明女子専門学校にとどまり、1955年3月、同校が淑明女子大学校となるに際して初代総長に就任した。

早川（沼野）はな<1914 理科>は、愛知県女子師範学校教諭を1919年に退職し、「其後京城帝大附属病院看護婦養成所講師となつたことがある」(15)というが、その時期は定かでない。

おわりに

以上みてきたように、桜蔭会は、高等女学校と女子高等普通学校を中心として旧韓国～植民地朝鮮女子中等教育界の重要な一角を担った。なかんずく京城（京城第一）高等女学校・釜山高等女学校・淑明女子高等普通学校・進明女子高等普通学校・京城女子高等普通学校（漢城高等女学校・京畿高等女学校）などは、桜蔭会にとって拠点校ともいえるべき学校であった。しかし、内地と外地とを問わず戦前の日本においては、女子中等学校といえども男性教員が優位であり、女性教員のシェアは限られていた。現に桜蔭会は、朝鮮においてひとりの校長も出していない。ちなみに内地では、土谷フデ<1897 高等師範科>が1914年「私立宇和島実科女学校（後に公立となる）訓導兼校長となり・・・是れ女子にして公立高女校長となりしものゝ嚆矢である」(16)といわれている。このことから、男性優位は外地において一層甚だしく、その分、桜蔭会員の活躍の場は制約されていたと推察することができる。

また、桜蔭会員が朝鮮に進出したといっても、彼女らの職歴は、多くの場合結婚に左右された。夫に随行しての転勤、いわゆる寿退職、結婚のための内地帰還などが多く、したがって、朝鮮での勤務期間も概して短かったのである。

本研究を進めるにあたり、実は結婚に関してひとつの仮説を立てた。茗溪会からの分離独立という桜蔭会の成り立ちからして、朝鮮教育界においても茗溪・桜蔭の縁組みが多々みられるのではないかと、ということである。しかし、結果的にこの仮説は実証できなかった。本稿で紹介できたのは、梶原梅次郎・慶子、泥谷良次郎・成、重田勘次郎・ひさの3組のみである。

ただ、茗溪・桜蔭の単なるコンビネーションという意味でなら、局地的にそれが存在した可能性はある。上記の桜蔭会拠点校のうち京城（京城第一）高等女学校と釜山高等女学校は、茗溪会員の高等女学校関係者にとっても重点校だったからである。

〔註〕（※はハングル文献）

(1) 桜蔭会編『桜蔭会史』 1940年 p.51

(2) 同上 p.299

(3) 同上 p.710

(4) 『釜山教育五十年史』 釜山府・釜山教育会 1927年 附録 pp.31-33

(5) 『桜蔭会史』 p.707

- (6)※旧韓国「官報」 第 4467 号 1909 年 8 月 31 日
- (7)『桜蔭会史』 p.753
- (8)※『淑明五十年史』 淑明五十周年記念事業会 1956 年 p.59
- (9)同上 p.79、p.185
- (10)『桜蔭会史』 p.909
- (11)※『京畿女高八十年史』 京畿女子高等学校・京畿女高同窓会 1988 年 p.761
- (12)※『淑明九十年史』 淑明女子中高等学校 1996 年 p.769
- (13)『桜蔭会史』 p.992
- (14)※『淑大五十年史』 淑明女子大学校 1989 年 p.22
- (15)『桜蔭会史』 p.840
- (16)同上 p.302

Tokyo Women's Higher Normal School and Education in Korea Before 1945

INABA Tsugio

Tokyo Women's Higher Normal School was the leading training institution for women teachers in pre-Second World War Japan. This paper investigates the educational activities of graduates of Tokyo Women's Higher Normal School in Korea before 1945.

Graduates of Tokyo Women's Higher Normal School, known collectively as 'Ohinkai', had been particularly active in education overseas since 1900. In October 1938, of Ohinkai's 3955 members, 259 (6.5%) were living abroad. Of these 259, the largest number was to be found in Korea.

Ohinkai played a significant role in the field of women's secondary education in Korea before 1945. Seoul and Pusan, in particular, saw the formation of a number of bases for this activity. Nevertheless, male teachers maintained their dominant position in the pre-war period, both within Japan itself (*naichi*) and in its overseas territories (*gaichi*). Consequently, the proportion of female teachers was restricted. In fact, no Ohinkai member ever attained the position of school principal in Korea.

Furthermore, the careers of these female teachers were largely determined by their marriages. They were often called upon to return to Japan for marriage, or to transfer schools within Korea in order to accompany their husbands. Thus, their periods of employment in Korea were, in general, short.